

岡田万里子著『京舞井上流の誕生』

丸 茂 美恵子

本書は、「京舞井上流とこの流派が有する伝承作品の形成にいたる過程を対象とした考察であ」(3頁、以下該当箇所の本書の頁数を記す)り、序論と結論を備えた二部に分けられている。内容は、二部の各章は旧稿を柱としているが大幅に加筆・改稿をし、序論と結論は新稿を書き起こし、再構成された井上流の歴史学的研究である。ちなみに、著者の学位請求論文がもとに成っている。

旧稿のうち、最初のもは一九九五年の「京舞井上流の研究」(早稲田大学修士論文)、「井上流と能——都をどり以前——」(『楽劇学』二号)、続いて一九九六年「井上流と人形浄瑠璃」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第四十一輯第三分冊)となり、学生時代を含め著者が井上流の研究に二〇年以上という膨大な年月を費やしてきたことがわかる。それ以降、研究の視野は拡がり、一九九七年には「近衛家奥の芸能——『円台院殿御日記』文政元年の芸能記録——」(『演劇研究会会報』第二十三号)という本書の白眉をなす史料への着手がみられ、一九九八年から二〇〇〇年までの連載「花街をどりの流れ」(『月刊舞踊』)と一九九八年の「稽古事と歌舞伎」(『歌舞伎文化の諸相』岩波講座歌舞伎・文楽 第四巻)では井上流ははじめ舞踊の受容層へと関心が向けられ、さらに二〇〇一年の「上方の藤娘」(『日本の伝統芸能』)と二〇〇五年の「『上方唄』と『江戸歌』——三味線音楽の呼称の変遷が意味するもの——」(『日本伝統音楽研究』第二号)では上方文化に焦点が絞られる。これら著者の研究テーマの着実な取り組みと緻密な考察の積み重ねから「博士(文学)」の学位取得は当然の帰結である。

本書は大小取り混ぜて数十の新たな知見や推論に満ちている。なかには既知の事柄やそれらに関する評者との認識のずれもみられるが、評者はそれらを新鮮な感覚で受け止めた。これは偏に著者の廉潔な人柄と真摯な姿勢によるところであろう。目次を追ってすべての内容の吟味に紙幅を割く余裕はないが、幸いに「結論」で著者が要領よくまとめているので、そこから評者が興味深く感じた重要な知見を二点取り上げ、再評価を加えたい。

(1)「今日特色的な伝承曲を有していると考えられている井上流の舞踊作品は、近世後期の京都においては特色的な伝承曲であったわけではなく、一般的なものだったと考えている。」(441頁)

これは、結論の末尾に「なぜ、このように特異とされる日本舞踊流派が形成されたのか、なぜ、

固有の作品の多い特色的な伝承作品群が形成されたのか、その形成過程に対する研究視座を提供できたのではないかと考えている。」(451頁)と結んで筆を擱くので、著者の第一の問題であったことが知られる。

本文では、「第一部 井上流の歴史」の「序章」「第一章」「第二章」を通して数多の資料に基づいた考察から前記の問題を追求し、「第三章」の「五三世井上八千代が継承した井上流伝承曲」において伝承曲の分析から考えを総括している。

著者の考察は、「井上流が祇園と結びつき、一花街において伝承されてきたため、他の影響を退けることができ、江戸時代後期の舞踊を保存することができた」(168頁)という見解である。具体的には「井上流が祇園と結びついた契機こそが、三世の都をどり振付への参画であった」(140頁)わけで、三世と都をどりの関わりを当時の資料に基づいて丹念に調査し、これまでの明治五年に「井上流と祇園が盟約を結んだという」(141頁)由来や通説を否定し、三世が「祇園の舞踊師匠として、その地位を不動のものとしたのは、おそらく明治二十年前後のことであっただろう。」(193頁)と時期を特定する。

つまり、端的に言えば、それまでは当時の一般的な他の流派と同じであったと考え、これは斉藤雅美が「上方の舞踊と井上流——「江戸唄」のこと——」(『京舞名作集(国立劇場舞踊公演)』)で結論づけた「井上流は「能から出た女舞」でも「堂上の舞」でもなく、江戸後期の上方の舞踊の姿をそのまま伝えているものである。」(プログラム19頁、本書26頁)に補強する資料を数多く示した結果である。その立証のために費やした年数と本書の紙数を思うと著者の粘り強さにまず敬服したい。

あえて一つ付け加えると、その考えについて序論で渡辺保『日本の舞踊』(1991年)を明示し、反論の対象に定めている(25-26・28頁)。批判的精神は健在であるべきだが、220頁余の新書で井上流に言及した、わずかな記述を取り上げる行為は公正とは言えまい。

(2)「近衛家の当主夫人の日記を調査したことにより、初世が近衛家に奉公にあがっていたとされる寛政年間の、近衛家の女房の生活を知ることができた。」(443頁)

「当主夫人の日記」とは近衛家二十四代経熙夫人董子の『円台院殿御日記』(陽明文庫所蔵)を指す。初世(本名 サト)が近衛家にあがったと断定できないためか、本書の「結論」では前記の

とおり簡略に留めたようである。

本文では「第一部 第一章」の「二 堂上方への出仕」「三 近衛家女房の役割」「四 堂上方との交流」を中心に執筆されている。なかでも著者が特に関心を抱いたのが、寛政元年初出の「お八千」という女房で、文政七年の亡くなったという記録まで彼女の特性や動向を日記の上で追いつつ、近衛家の女房の生活を窺う。そして、「お八千」という女房がサトであった可能性は低いとしておくが、少なくとも、寛政から文政までの近衛家に、「お八千」と呼ばれて重用された女房がいたということは明らかである。」(68頁)と口惜しさを滲ませている様子がよくわかる。

また、初世は寛政九年に宿下がりを経験されたとされるので、「文政元年の資料から検討せざるを得なかったが、時には三味線は用いられなかったと述べられたような撰家の奥向きでおこなわれた芸能が、三味線も浄瑠璃も、舞踊も曲馬も、軍談講釈などまで含む多様なものであったということがわかった。」(447頁)ことも、(1)で触れた井上流が「能から出た女舞」でも「堂上の舞」でもないことを裏付ける重大な発見としてつなげる。これらは本文では、「第二部 井上流の舞踊」の「第一章」で「二 万歳と舞楽」「三 能楽」「四 曲馬と舞踊」ほか全七節にわたって収められている。

さて、武家にみる豊富な芸能記録としては『松平大和守日記』や『宴遊日記』など多くが知られるほか、ことに初期歌舞伎では公家や僧侶の日記が貴重な証言となって芸能史を築いてきた面があるが、『円台院殿御日記』は文政元年に限定しても多くの芸能記録を有する。このような公家方の日記の存在を改めて紹介した功績と記述に対する優れた洞察力は近年注目されている座敷芝居のジャンルにも実りある収穫を与えるに違いない。

本書は資料を重視した学術研究書で著者の研究者としての優秀さを示すものである。通史として簡単に読める書ではなく、資料を注視するあまり、時には芸妓ひとりの人名にまできめ細かい考察を巡らすなど判読する煩雑さは否めないが、問題に対して適確に回答を示すなど文章は明快さを持っている。ここでは、細部については攔き、評者から次の問題を提起して締めくくりたい。

著者は「都をどり」の創始に関する卓見を述べている。それは、慶応三年以降と考えた舞さらえの番組五番のうち序幕の「手向唄」を除いた四番が大勢の立方によるもので、こうした舞踊公演が「都をどりの創始に直接的に結びつくのではないだろうか。」(253頁)と考え、儒者の詩の描写から文化一〇年頃には鴨東花街では日常的に歌舞の会がおこなわれた状況を証明し、「このような歌舞の会が、都をどりの創出に結びつくと思われる」(255頁)という推論である。評者の経験から

の話で憚りもあるが、国立劇場の齊藤が制作した前述の『京舞名作集』(1991年5月23・24日)では、二世振付と伝える義太夫・上方唄「隅田川(双面)」が終盤になって赤い櫛を口に咥える型(赤い舌を出す型の替え)を繰り返すのが衝撃的だった。或いは本書で強調する人形浄瑠璃の撰取(364-365頁)とも考えられようが、本書を繙き、このような型が生まれる土壌を垣間見るような気がした。

著者は、撰家奥で披露された様々な「芸能のすべてが初世および二世の振付作品に直接的な影響を与えたかどうかは、今後の考察が必要である。」(244頁)と述べるのをはじめ、伝承曲の分析に意欲を示している。また、「上演曲の分析には、当時の舞踊詞章の詳細な検討が必要であり、」(192頁)という研究姿勢も明らかにしている。評者はそれらに加え、伝承曲にみる花街特有の演出・型の考察も問題として提起したい。

もう一つは、『円台院殿御日記』中から15件ほどの「お八千」の記録を抽出し、注意深く観察しながらも大胆な仮説に至らなかつた点が惜しまれることである。著者は本書のなかで人名、それにまつわる出自や経歴を詳細に調査している。この「お八千」に関して可能な限りの分析を行う。「お八千」は特別な待遇を受けた筆頭格の女房であり、右筆も務めたこと、実家が関わっていること、禁裏能に出動した能楽師から礼を受ける立場であることなどが言及されている。いっぽう、初世が堂上方へ奉公にあがったというエピソードの核となる人物が「近衛家の老女南大路鶴江」で、著者によって南大路家が「上賀茂神社の社家」「禁裏・仙洞御能への出仕も確認できる和泉流狂言の家」と判明したにもかかわらず、著者は「南大路鶴江が近衛家の老女であったとしても、日記の記録からは、鶴江の名乗っていた源氏名を知ることは不可能であり」(67頁)と半ば諦めに近い態度をみせた。が、日記から分析された「お八千」は「南大路鶴江」に擬せられる一番近い人物であったのではなからうか。それは永久に仮説の域を出ないかもしれないが、説明するまでもなく、初世が宿下がりの際に鶴江から「八千代の名」を賜ったという伝承に齟齬をきたす事柄ではない。

かつて歌舞伎研究の泰斗でいらした今尾哲也が「仮説なくして学問はない」と断じられたことがある。強いて本書の不十分な点を挙げれば、問題の設定が明確なだけにそれを資料で実証する過程に重点を置いた反面、各論に孕む問題を柔軟に対応し得なかつた面が盲点がつかれる隙を与えたくないことと言えようか…。

なお、本書は二〇一三年度「サントリー学芸賞」芸術・文学部門の受賞に輝いた。

(思文閣出版、2013年2月刊行)